

ワシントン情報、裏 Version

2005年10月18日

竹中 正治

「アメリカ人と家族の絆:映画“In Her Shoes”」



【弁護士の姉、あばずれの妹】

家族(夫婦、親子、兄弟)の絆(きずな)回復、あるいは再発見のストーリーは、アメリカ人が大好きな筋立てのひとつである。Cameron Diaz 主演の最新作、“In Her Shoes”は、対照的な姉妹、妹マギー(Cameron)と姉ローズが姉妹の絆を再発見するストーリーだ。

姉ローズは法律事務所に務める法律家としてエリート職業の道を歩んでいる。一方、妹のマギーは定職もなく、放蕩な生活をしている「あばずれ」である。男と遊び、泥酔することを繰り返す。母は二人がまだ幼い時に死に、父は再婚、マギーは継母と父の家に住んでいる。しかしトラブルメーカーのマギーは継母に家から追い出され、ローズのアパートに転がり込む。しかし整然とした生活をしているローズと自堕落な習慣にはまっているマギーが上手行くはずもない。マギーは部屋を散らかし、姉が大切にしているシューズ・コレクションの中から、勝手に靴をはき、汚したり、ヒールのかかとを折ったり、やりたい放題である。“In Her Shoes”のタイトルは、まずはここから出ている。

堅いローズであるが、法律事務所の上司と実は愛人関係にある。ローズが不在の時に、この事務所の上司が花束を持ってローズのアパートにやって来る。シャツ一枚でベッドから起きたばかりのマギーが偶然ドアを開け、「あらあら、姉は留守で…」という展開になるのだが、この上司、リピーダーがスーツを着ているような男で、シャツ一枚で扇情的な姿をしているマギーにムラムラとして、そのまま部屋に入り、マギーをベッドに押し倒す。運悪く、そこに姉のローズが帰って来て、部屋に入ると、そこでは上司がマギーをベッドに押し倒し、「こと」のまっ最中である。もう修羅場だ。上司はローズに向かって「すまない。勘違いしないでくれ……」とか言おうとするが、勘違いもへったくれもない。ローズは完全にプツンして、「みんな出て行きなさいよ！あなたも！」と叫んでマギーも追い出される。

その少し前にマギーは、父と継母の家で偶然祖母(母方)から送られた古い手紙の束を見つけた。手紙はお誕生日祝いのカードなどであるが、二人の娘には見せずにダンスの奥にしまわれていた。祖母の居所を知ったマギーは、他に行くあてもないので、祖母のもとへ向う。祖母は海辺の町の高齢者専用高級リゾート施設(高級老人施設)で余生を送っていた。ここで祖母との再会を果たし、マギーは施設の介護人として働き始める。年寄りばかりの施設で、若いマギーは歓迎される。視力を失った元大学教授は、マギーに詩を朗読するように求める。勉強もろくにしなかったマギーは、読むのも下手だ。しかし老先生は彼女に詩の読み方を指導し、「よくできたね。A+, 賢い子だ」と言って励ます。こうしてマギーは変わり始める。

一方、ローズは法律事務所を辞めるが、彼女に思いを寄せていた若い法律家から求愛され、二人はとんとん拍子で婚約する。ところが、婚約者と二人で参加した友人のパーティーで前の事務所の上司と出会う。それがきっかけで、以前の情事が婚約者の知るところとなり、「きみとは結婚しない」と言われ、悲嘆にくれてしまう。そんな彼女もひょんなことから、祖母が生きていることを知り、父に祖母の居所を教えろと詰め寄る。ローズが祖母の居所を訪れ、おずおずと玄関のベルを鳴らすと出てきたのはマギーである。「あんたここで一体何してんのよ？」

「どうして私達から離れて行ったの？」と問う二人の孫娘に祖母は娘(母)の死の真相を語る。母は交通事故死と言われていたが、自殺だった。「子供達をおねがいします」という一言だけ祖母宛の書置きが残されていたのだ。しかし父は娘達が祖母の世話を受けることを拒否し、再婚した。自分らが幼い頃、母と一緒に撮った祖母のアルバム写真を見て、ローズとマギーは母親の記憶を甦らせる。

ローズはマギーに、婚約が破棄されたことを告げる。なんとかしてやりたい気持ちに駆られるマギーに施設のお婆さん達が寄って集って言う。「婚約者だった男をここに呼びつけちゃいなさいよ。ローズが病気だとか言ってさ」「妊娠したって言ってやりゃあいいんだよ」

ローズの具合が悪いという知らせを受けて、彼氏はやって来る。元の事務所の上司との情事を知って一度は動揺したが、まあ、好きな気持ちは変わってはいなかったということだ。この後の展開はハッピーエンドで、ローズと婚約者の結婚式がラストシーンである。姉はトラブルばかり引き起こしてきた妹を許し、妹は姉の結婚を祝福する。祝福の言葉は、施設の老教授が教えてくれた詩の朗読だった。

【家族の絆への渴望】

「家族の絆」というテーマは、勿論日本を含めた全世界的なものであるが、米国では頻度、人気の双方において日本をはるかに上回っていると思う。とりわけ多いのが、離婚した、あるいは離婚しかけている夫婦という設定である。最近の映画をちょっと思い出しただけでも、ごろごろとある。例えば、”Mr. & Mrs. Smith”(2005)は人気俳優のブラッド・ピットとアンジェリーナが夫婦役で共演するアクション・コメディである。男女二人のプロ・スナイパーが中南米の某国で「工作中に」知り合い、そのまま恋に落ちて夫婦になるが、双方とも自分の稼業(プロ・スナイパー)であることは秘して夫婦生活を送る。ところが、ふとした行き違いから、相互に疑心暗鬼が生まれ始める。用心深くなくては生き残れない稼業だから無理もない。疑心暗鬼は「相手は自分を殺そうとしている」という認識に変わり、とうとう夫婦でマシンガンを撃ち放ち、殺し合いを始めてしまうという壮絶な「夫婦喧嘩映画」である。しかし最後に共通の敵が判明し、協同で戦い、夫婦の絆を回復する。

“War of the Worlds”(2005)のトム・クルーズが演じた主人公は、女房と別れた前夫という想定である。前夫の主人公は元女房との間の娘と息子を守りながら、異性人の攻撃に追われて、NJからボストンの女房の実家まで辿り着く。しかしこの映画では夫婦の絆の復活はない。女房は金持ちの新しい夫と結婚し、その子供を身ごもっているからだ。娘を無事に守り通した主人公は元女房に“**Oh! Thank you!**”と言われて信頼を回復するだけで満足するしかない。

カルフォルニアのワイナリー地域を舞台にした“Sideway”(2004)は、地味な映画なのに、アメリカでは大変な人気だった。この映画のヒットの後、カルフォルニアのワイナリーを訪問する客が映画で登場したピノノアールを注文する回数が激増したと言う。この映画でも主人公は女房と別れた中年男性(職業は高校の教師)だ。主人公は内気で見かけはダサイが繊細なセンスの持ち主で、まだ前妻に未練を引きずっている。しかし分かれた前妻は既に金持ちの新しい婚約者との結婚が決まっている。男に

としては最悪の想定だ。主人公の夢は作家となることで、精魂こめた長編小説を出版社に持ち込むが、最終回答は「ボツ」。この主人公が、粗野で近づく女性を片端から「やってしまう」ことしか頭にない正反対の性格の親友とワイナリー地域を珍道中する。その紆余曲折の末に、主人公は新しい恋人を射止めるというほろ苦いストーリーが何故か大ヒットした。

【「大草原の小さな家」は夢物語】

米国の離婚率は先進国で一番高い。離婚率は婚姻率の約半分に達する。毎年結婚するカップルの半数の数だけ、離婚する夫婦がいるということだ。父と母の争いは子供の胸を締めつける。離婚は同時に子供の争奪、あるいは養育費負担問題を起す。再婚すれば子供はステップ・マザーあるいはステップ・ファーザーとの関係で悩む。要するにドラマ「大草原の小さな家」のような家族が力を合わせて生きて行くような安定した家族関係は、今の多くのアメリカ人には遠退くばかりの理想だ。壊れやすい夫婦、親子、兄弟の絆をいかに維持するか、壊れたものをいかに回復するか、それが人生の一大テーマになっている。これが「家族の絆」をテーマにした映画がこれほどにアメリカ人の間でうける理由なのだと思う。

米国に比べると日本はまだまだ「離婚後進国」で、片親家族の比率も低い。家計で相応の所得があり、親子一緒に暮していれば、自然と家族関係が維持できるような環境が日本では比較的維持されていると思う。これに比べると、例えばアメリカのご主人達が「家族の絆」「夫婦の絆」維持のために費やしている労力は莫大なものだ。日本人男性の視点で考えると、これは一体誰のおかげなのだろうか？ less demanding で献身的な日本型女房のおかげなのだろうか？ 果たして more demanding なアメリカ型女房は自分の幸福をより効率的に実現しているのだろうか？ 「男女平等参画社会」は必然的に離婚率と片親家族比率の上昇をもたらすのだろうか？ これらの問題をまたの機会に考えよう。

再び映画の話に戻ると、姉ローズと妹マギーがどうして著しく対照的な生き方になったのか、映画は語らない。しかし想像することは難しくない。母の死と言う「危機」に直面して、年齢が上だった姉ローズは「私がしっかりしなくては」と身と心を緊張させて、生活を律し、勉強にも励んだのだろう。一方より幼かった妹マギーは自分に注がれる愛情の源泉を見失ったことで、自暴自棄な生き方に傾斜をしてしまったのだろう¹。その結果、正反対の生き方を辿り、不仲にもなったマギーとローズが、祖母との再開をきっかけに母の思い出を甦らせ、それを共有することで、姉妹としての絆を回復することができた。結婚式を前に、祖母はローズに美しい一足のハイヒールを渡す。母から娘に伝えられたシューズだ。そのシューズで (in her shoes) ローズは結婚式を行う。私の味覚にとっては、かなり女臭いドラマだが、まずまずの出来栄えでしょうか。

以上

¹映画の難点を言えば、幼くして母を失った悲しみが、その後二人の娘の心にどのような傷と束縛をもたらしたのか、その点が説得的に描かれていないことだ。